

働きやすく 学びの深まる 学校づくりプロジェクト 第2期へ

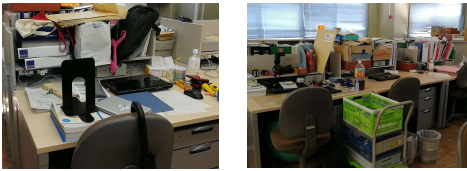
1. はじめに

本校では、平成30(2018)年度に文部科学省の業務委託を受け、「働きやすく学びの深まる学校づくりプロジェクト(働き方改革)」を進め、翌年からは「STEAM教育」を推進すべく、授業実践とカリキュラム開発に取り組んだ。これらの流れの中で、職員室の環境整備だけでなく、校内環境に関しても保護者とともに、安心・安全な環境にしていこうと協働的に取り組んできた。
また、教科等横断的な視点でカリキュラムを作成すべく、研究を進めようとした1年目、新型コロナウイルス感染症拡大による学校休業となり、休業中は、特別なカリキュラムで授業を進めていくこととなった。2年目も、臨時休校、行事の中止等によって、完全なカリキュラムを作成するには至らず、あくまでカリキュラム(案)として、作成した。これを、本格的に試行することができたのが、3年目に当たる今年度である。このように、世の中の大きな変化の中、学校組織や学校文化も、大きな変化を遂げた。
しかしながら、「働き方改革」「STEAM教育」「新型コロナウイルス」、どれも、私たちにとって「未知なる課題」であり、かつ、早急に対応しなければならない課題でもあったため、計画から実施までのスパンが短く、目の前の現実に対して柔軟に対応・実践していくことが、精一杯でもあった。そのため、今振り返ってみると、PDCAサイクルの「Plan」(計画)の段階での検討をもっと行うことも必要だったのではないだろうかと思う。また、柔軟に対応・実践していくことが、精一杯でもあった。「働きやすく学びの深まる学校づくりプロジェクト第2期」として、取り組みを進めていきたい。今回は、第1期を振り返りながら、第2期の方向性を考えてみる。
そこで、これらの反省をふまえて、改めて、「働きやすく学びの深まる学校づくりプロジェクト第2期」として、取り組みを進めていきたい。今回は、第1期を振り返りながら、第2期の方向性を考えてみる。

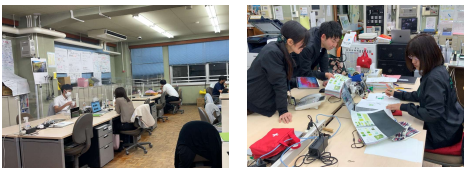
2. 第2期取り組みの前に…PDCA(第1期に実施したことの内容と評価)

＜職員室内の環境整備の中で、教員に一番影響を与えたもの＞

平成30年度以前の職員室は、各教員の机の上には、書類や本が積み上げられており、目の前の先生と顔を合わせることもなく1日を終えることもあった。
そこで、それまでは個人ロッカーとしていた職員室内のロッカーを、学年・校務分掌別ロッカーとし、情報を共有するようになった。また、「机の上に置くものは、PCだけ」というルールを決め、整理整頓を呼びかけるとともに、簡単な打ち合わせをしたり、相談をしたりすることができる空間へと変容させた。オープンな空間は、これまで「個室」を好んでいた教員にとっては、はじめは戸惑いがあったようだが、新しく作った『協働ワークスペース』は、「広いスペースで教材が作りやすい。」「そばに必要な文房具がすべてそろっていて、ここで作業が完結できる。」「好評であった。



机上の備え付けの本棚に書類を積み上げていたため、目の前の異学年の先生と、話し合うこと環境ではなかった。



机上整理が習慣化され、自然と対話ができる空間へと変容した。



協働ワークスペースは、仕事のしやすい空間であるだけでなく、そこで仕事をすることで、自然と話し合ったり、相談し合ったりすることができる空間でもある。

個業から協業へと変容した教員

＜校内の環境整備の中で、保護者に一番影響を与えたもの＞

令和元年度8月に大規模工事となった、運動場の人工芝をはじめ、トイレ改修や多目的室の設置等、設備面の変化は、もちろん保護者には好評であったが、保護者文化を大きく変容させたのは、HPのリニューアルである。
リニューアルにより誰でも簡単にページを更新することができるようになったため、保護者専用ページで、教員から保護者へ急な連絡やお願いをすることが可能となった。(これは、新型コロナウイルス感染症拡大による全国一斉休校や臨時休校の際にも大変便利なツールとなった。)

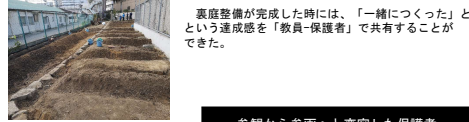
ここでは、子どもたちの日常の様子を写真でお知らせすることができるとともに、今、どんなことをがんばっているのか、取り組んでいるのか、具体的にブログ形式で伝えるようにした。
その結果、「一緒にやってみよう。」「お手伝いしたい。」「という保護者の声が増え、今では多くの保護者が毎日学校に来校し、掃除をしたり、授業サポートをしたりしている風景が日常的になってきた。



長年、荒地となっていた「裏庭」を教員で整備を進めた。そのようすを、豊かな学びを実現したいという想いとともにHPで掲載した。



HP掲載後、想いに賛同した保護者の方々が連日、裏庭に足を運んでくださった。「実家で農業を営んでいるんです。」「という方が、畑作りのアドバイスをくださったり、「畑作りが楽しかったのですが、とてもワクワクします。」「と一緒に楽しみたいという声が見られた。また、学年の違う保護者同士が交流する場もなった。



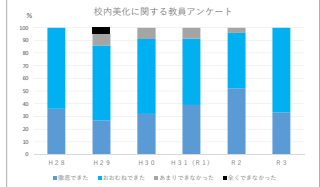
裏庭整備が完成した時には、「一緒につくった」という達成感を「教員-保護者」で共有することができた。

参観から参画へと変容した保護者

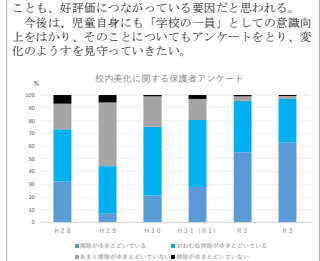
＜データでみる意識変化＞

校内の環境整備については、実際の活動を通して、「教員-保護者」の意識を変えていくことができたのは、と考える。
このことは、過去6年間のアンケート結果にも表れている。(令和4年度のアンケートについては、現在集計を行っている段階である。)

①教員の意識について
下グラフを見ると、「働きやすく学びの深まる学校づくりプロジェクト(働き方改革)」を実施した平成30年度以降は、教員が「校内美化を推進することができなかった」層(灰色・黒色部分)は、減少してきている。このことから、校内環境への意識は維持できていると言える。ただ、教員は毎年人事交流により入れ替わるため、今後維持していくためには、年度当初の伝達研修等が必要となる。その形式についても、今後検討を行っていく。



②保護者の意識について
下グラフを見ると、「掃除がゆさどい(青色)」「おたね掃除が苦手(水色)」の割合が年々増え、保護者からも評価を得ていることがわかる。
保護者自身が、校内美化活動に日常的に参加していることも、好評につながっている要因だと考えられる。今後は、児童自身にも「学校の員」としての意識向上をはかり、そのことについてもアンケートをとり、変化のようすを見守ってみたい。



＜STEAM教育を中心としたカリキュラム・マネジメント＞

令和2(2020)年度に国立教育政策研究所教育課程研究指定を受け、「教科横断的な学習とSTEAM教育の実現をめざしたカリキュラム開発」を研究テーマとして、教科等横断的な学習を進めることになった。
そこで、研究を推進するために、まずは校内の組織編成を変更した。

部会名	職員人数(人)	平成30(2018)年度	令和元(2019)年度
国語	3	6	6
社会	2	2	2
算数	4	6	6
理科	3	2	2
生活・総合	1	1	1
音楽	2	1	1
図画工作	2	0	0
家庭科	2	1	1
体育	2	2	2
外語	1	1	1
道徳	1	0	0



部会名	再編後
言語教育(国語-外語)	5
社会(社会-生活・総合)	4
数理(算数-理科)	8
芸術(音楽-図画工作)	1
実動教育(家庭科-体育-総合教育-保健体育)	6

(編成後)STEAM教育を推進するにあたり、指導内容の類似性・系統性をふまえて、上記のように教科を統合した部会を再編成した。合わせて、これまで研究会議に参加していたものの、どの教科部会にも属していなかった「養護教諭」「栄養教諭」を、「実践教育部」に位置づけた。これにより、子どもたちの健康について、それぞれの立場からの意見を取り入れることができるようになった。

(従来)本校も、公立小学校と同じように、毎年教員の入れ替わりがある。そのため、人数の多い教科部会もあれば、教員数少ない部会もある、ということが続くこともある。その場合、教科研究を「個業」として進めていくことはなかなかできなかった。
また、カリキュラムの開発のために、4月・7月・12月・3月と年度当初・年度末・長期休業前、見直しを行った。カリキュラム案は、職員室内に常時掲示しておき、そこに付箋紙やマスキングテープを用いて、すぐに変更・修正を書き込むことができるようになった。



職員室に掲示されたカリキュラム



各部会で話し合いのようす



各部会で出てきた意見(これも職員室に掲示)

3. 第2期へ

2で示した以外にも、多くの文化変容がある。以下、簡単に示しておく。

- ＜業務の効率化・業務分担の最適化＞
 - 各種資料のペーパーレス化・提案内容を「ロイコノート」や「Teams」で共有
 - 職員会議の回数減…(従来)毎月1回(30分程度×4回)(現在)月1回(20分程度×1回)
 - 研究会議の時間短縮…(従来)2～4時間(納付するまで話し合う)(現在)40分～60分(終了時刻を事前に周知しておく)
- ＜チームで取り組む教育実践＞
 - 各担任が、自クラスに配属された実習生を指導(現在)学年担任全員が、それぞれの専門性を活かして学年に配属された実習生を指導

- ＜保護者との連携強化＞
 - P.T.Aと協働企画・運営の行事を新設…防災宿泊訓練・雨天小まつり
 - 放課後遊びの保護者サポート導入…定期的に保護者の方々子どもたちの遊びを見守ったり一緒に遊んだりしてくれるPTA活動

- ＜キャリアに合わせた研究推進＞
 - 研究会議の進め方…(従来)研究部からのトップダウン型(現在)全員が考えるボトムアップ型
 - 研究授業の実施…(従来)全員が行う(現在)勤務1年目は行わない(まずは観察を重視する)勤務2年目～3年目は、自分で行う/行わないかを選択勤務4年以上は行う

- ＜学校教育目標の実現に向けて＞
 - 時間差校時表…運動場でのびのび遊ぶスペースの確保のため、低学年と高学年で休み時間をずらす
 - トリオタイム新設…1～3年の縦割り活動(低学年のうちからリーダー性を養うこと、児童のコミュニケーション能力の育成を目的としている)
 - 縦割り活動の重視…クラブ活動・委員会活動(従来は、学年ごとに活動していた)通学班活動(従来から班編成はされていたが、一緒に遊んだり、交流したりという活動がカリキュラムに位置づけられていなかった)

ノーマタイム制導入(子どもたちの自律の育成)
平成30年度以降、大きく変化を遂げた本校だが、5年の歳月を経て、それらを支えてきた教員の多くが、3月末には、大阪府下の学校へ転出してしまう。また、4月からは、働き方改革がより一層推進されることとなるが、これまでの経緯を知らず、本校に転出してきた人には、大きな戸惑いを与えることになるだろう。そのため、4月当初の教員研修で「働き方改革の意義」だけでなく、本校がめざしてきた「教育実践を高めるための働き方」「効率性を重視するための環境整備」「協働的に学ぶ合うための学年・教科を超えた交流」等、伝える必要があることはたくさんある。
学校教育目標『個が生きる学校』の『個』とは、「個業」ではなく、それぞれの持ち味を業務にもいかし、苦手なことも互いに補いつつ、集団の中でそれぞれの『個(多様性)』が生きていくことをめざす、ということを含めて共有してほしい。
そのために、年度末にはこれまでの評価を行い、共同研究者として、田村・陸奥田からの助言を受け、第2期へとつなげていきたい。